

二次元ぷち文庫

月がナイトアウトだ

常闇に伏す凜姫

倉田シンジ

表紙イラスト：緋山狐

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『ダークナイトプリンセス 常闇に伏す凜姫』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



成吉思汗の地獄

常闇に伏す凛姫

倉田シンジ
表紙 / 緋山 狐

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

シア王女

立憲君主国家ベルンシュの優しき王女。

おしとやかで上品な物腰の少女ながら、若くして国政を執れるだけの才がある。悪を厳しく裁く義賊としての顔も持ち、その際には性格まで一変させる二面性を持つ。

コレット

外務大臣の娘でシアの幼馴染み。王女を慕う妹のような存在。

誘拐事件に巻き込まれる。

レンガ造りの家が続く街並みをガス灯が彩り、うつすらと浮かび始めた月明かりと一緒に、往来を行く人の姿をぼんやりと照らしている。

果実を並べた路地裏の屋台は店じまいを始め、大通りに軒を並べた金物屋、布屋、最近できたばかりの銃器店も店内の光を落とした。代わりに酒場の軒先にはランプが灯され、一日の疲れを癒したい人をどんどん呑み込んでいく。

酒場に入った中年男の一人が、鶏肉にかぶりつく顔見知りを見つけて声をかけた。

「よう、久しぶりだな。うまそうなもの食ってるじゃないか。最近は何調子いいのかい？」
手を上げて応えた男が、豪快に呷った酒で口内のものを流し込んで満足げに応える。

「んぐ……ん。いやあ、最近はずいぶん景気がよくなったよ。そっちもだろ？」

二人は大通りにある雑貨店とパン屋の店主。会話にはここ最近の街の活気が表れていた。「シア姫さまさまだよ。こないだの法律ができてから、ずいぶん金の回りがよくなった」「そうだな。最初はお飾りのお姫様と思ってたが、こりゃ本物だ」

あとから来た雑貨屋店主が、先にいた男と同じ料理と酒を注文し、席に着いた。これが十年前なら、ここにいる二人はこんなご馳走は食べられなかっただろう。

「あの若さできちんと政治ができるってんだから、たいしたもんだ」

「うちの店の若いなんて、男も女もシア姫様にどっぷり心酔してるよ。確かに、とんでもなく綺麗でらっしやるからなあ……。俺も、もうちよつと若けりゃ……」

シアという人物の話から、最近の客の趣向や金の使いつぶりまでを話しながら、二人はどちらからともなく酒場の入り口近くに掲げられたタペストリーを見上げていた。

そこにはこの国、「ベルンシユ国」の国旗が掲げられている。加えて、赤青白の三色旗の中心には、鷹と剣と兜の紋様が組み合わされた、とある紋章が描かれていた。

それは近代立憲君主国家であるこの国の象徴。今も脈々と続く王室の紋章——。

※

酒場のある下町から街の中心へ向かって大通りを行くと、やがて大きな川に行き当たる。そこには大きな橋が架けられ、その向こうにはひととき大きな建築物があった。

この街——あるいはこの国のシンボルであるかのように堂々とした外観。敷地はどこまでも広く大理石の装飾は豪華。西洋的美的感覚をこれでもかと詰め込んだ白亜の城。二百年ほど前、まだこの国が王国と呼ばれていた頃に建築された王宮だった。

議会が設置され、近代的な国家へと生まれ変わって以降も、この国で王室の地位は変わらなかつた。王族は国政へ参加し、この宮殿も相変わらず政治の中心であり続けている。その宮殿の奥まった場所に位置する執務室に——宮殿の造りに比べると質素すぎるほどの椅子に腰掛け、机の上の書類の束にペンを走らせる少女がいた。

大きな窓から入り込んできた夜気を含む風に、少女がふと顔を上げる。柔らかな印象の細い眉に、上品さを湛えた優しげな眼差し。すつと通った鼻すじも、ぷっくり膨らんだみ

ずみずしい唇も、その美しさに一点の曇りを感じさせない。

「いけない、もうこんなに暗くなって……。少しだけのつもりだったのに」

わずかな驚きに漏らした言葉にさえも、まるで鈴が鳴るような上品で心地よい響きを持たせて。その美少女は背もたれに細い身体を預け、腕を伸ばしてわずかに背伸び。抑えきれない上品さをにじみ出させる彼女の言動に、わずかな少女らしさが垣間見えた。

「んっ……」

薄赤いドレスに包まれた胸元も反らされ、年頃を迎えた思春期の少女にふさわしい、大きすぎず小さすぎずの十分な張りに満ちた盛り上がりを見せつける。

と、そのとき。重厚なドアの向こうに人の気配が起こった。

「シア姫様、いらっしやいますか」

聞き慣れた声とノックの音。

「ええ、どうぞ」

シア姫と呼ばれた少女が応えると、開いたドアからはメイド服の女性が現れた。政務の中心であり王族の住居でもあるこの宮殿には、多数のメイドや執事が存在する。シアよりは年上なものはまだ年若い彼女は、王女付きの専従メイドだった。

「姫様……そろそろお時間です。急ぎませんと」

「え……。もうそんな時間ですか？」

ゆっくりと立ち上がりながら部屋に置かれた柱時計に目をやり……少女は固まった。

「……！」

そうだった。今日は夜から社交界恒例のパーティーがあり、王女であるシアもまたそれに出席せねばならず……。夕方からわずかに空いた時間を利用して少しでも雑務をこなしてしまおうと、執務室に籠もったのがもう二時間も前のことだ。時計の針は、もうすぐパーティーの開催される時間を指そうとしていた。

「もつと早く知らせてくれてもよろしいのですに……！」

慌てて——とはいってもドレス姿ではどうしても緩やかな動きになってしまおうが——シアは執務室を後にしようとして、立ちふさがるメイドに止められた。

「お待ちください、ドレスが皺になっております。一度自室に戻られてお召し替えしませんと……。それとわたくし、もう何度もドアをノックして時間をお知らせしました」

少しの時間だからとドレスに着替え済みだったのがあだとなった。仕事にすっかり夢中になって、椅子に座り続けたドレスの裾は皺になってしまっている。加えて、自分が執務に夢中になっていたあまりメイドの気遣いを無駄にしていたと指摘され、

「そ、そうでしたの……ごめんなさい」

しおれたようにしゅんとする王女。

しかし一方のメイドは慣れたもので、まるでそれも計算のうちというように落ち着き払

9

っている。むしろ、かしづくことが当然のメイドにすら必要以上の威を振るわない王女の謙虚さに、穏やかな微笑みを浮かべていた。

「大丈夫です。まだ充分間に合いますよ。さ、こちらへ」

メイドに手を引かれて顔を上げた少女は、まるで西洋人形のように美しい。

王族は十六歳から国政に参加する義務がある。幼い頃からそれ用に教育を受けてきたシアも同様、若い女性とはいえ王族としてそれなりの権限を持たされており、今では立派に仕事をこなしていた。その仕事ぶりは国民にも広く知られるところで、むしろ、今のよう
に仕事に打ち込みすぎるくらいだ。

執務室からさほど遠くない自室に戻るや、メイドは手際よくシアの衣服を脱がせていく。上品な下着を着けた裸身が露わになり、ドレスに隠されていた身体のラインがランプの明かりに浮かび上がる。着やせするタイプなのか、シアの腕も足も全体的に少女然としてほっそりしてはいるが、ちょうどいいボリュームを形良く盛り上げる胸元やくびれた腰回りは少女とは思えない絶妙な女性らしさを持っていた。

王女の服をてきぱきと片付けたメイドが、新たに黒いドレスを持ち出してきた。

「それと今日のパーティーですが、身内の方だけになりそうですので……姫様のお好きな衣装でも構わないと思いますよ」

そう言ってドレスを広げてみせる。シアは嬉しそうに目を細めた。

「うふふ、あなたの衣装選びはさすがですね」

「ありがとうございます。……シア様のお好みはもう把握いたしておりますので」

伝統と格式の塊ともいえる王室内では、立場上、あまり下手な格好はできない。そんな中でまだ十代を抜け出していない姫が好む衣装といえは、ごく限られていた。

それは黒を基調としたゴシックドレスだった。各所には可愛らしい飾り気に富んだフリルが存在している。嫌味にならない程度に遊び気のある、いわゆるゴシックロリータの意匠を含んだドレスだった。

「嬉しいですね。最近はおちこちの外交官の方が頻繁にいらっしやるせいで、なかなか私の好きなようにできませんでしたもの……」

ドレスと朗報に頬を緩めた王女の顔が、まるで花が咲いたような微笑に綻ぶ。

「うん、とても可愛らしいドレスです」

上品な言動のせいにか、若さのわりに落ち着いた印象を持つてしまう王女の見せた年相応の少女らしい笑顔。上品で、穏やかで、優しく。仕える者を嬉しくさせる笑顔……この表情を見たくて仕えているようなものだと思つた。

だからこそ、気になることもある。

ドレスに袖を通させ、流れる金髪を梳いて、胸元を押し込んで腰をキュッと締めて。

「姫様、お疲れになつてはいませんか……？」

着替えをさせながらメイドの発した言葉に、シアはわずかに苦笑しつつ。

「ううん、大丈夫よ。ありがとう」

身の回りの世話をしているメイドは、シアのこの細い肩にのしかかる重圧を知っている。毎日午前中は執務に忙しく、昼食もそこそこに午後もなにかしらの仕事に明け暮れ、自由な時間は日が落ちてからのわずかな時間のみ。それだって、今日のように国の仕事といえなくもない行事に駆り出されることもある。この年頃なら、そんな生活を苦痛に感じてもおかしくない。

「充実はしていませんのよ？ ……ただ」

迷うようにわずかに言いよどんで。

「最近はなかなか自分の時間が取れないのが悩みの種かしら」

彼女が言うのは単純に時間に対する願望だけ、というわけではない。

いくら能力があろうとも、まだシアは若い。そんな少女が自分の上に立って国政を執ることに不満を持つ老官僚も多かった。

そんな理由もあって、なかなか自分の思うように仕事させてもらえず、必要以上に時間がかかり、結果として自分の時間がなくなる。年頃の少女としては悩みどころだ。

「ご愁傷様です」

「ふふっ」

お堅い言葉ながらも慰めてくれていた様子の子のメイドにもう一度苦笑し、シアは着替えを終える。王女はドレスを楽しむようになると回転して柔らかにスカートを舞わせると、

「不満ばかりを言ってもしょうがありません。さあ、参りましょう」

黒のドレスに身を包んだ少女が部屋を出ていく。

姫の一日は、まだまだ終わらない。

※

国の高官がずらりと顔を並べた会食が終わり、集まった人々も今は三々五々。

「そろそろ姫様も身を固める時期ですか、はははっ」

「いえ、未熟な身ですから……そこまではまだ考えられません……」

身内の会合とはいえ、集まるのは身分のある者ばかりだ。シアは今、もはや恒例となりつつある政府高官との会話に四苦八苦している。

(ふう……)

周囲を見渡しても、いるのは父親と同じような歳の男性ばかり。そんな人々の会話に混ざれと言われても、心休まるはずがない。むしろ放っておいてくれた方が助かるのだが、王女を囲む周囲としてはそういうわけにもいかない。

「しかし姫様、最近はずいぶん国政に忙しいとか。せっかくお綺麗なのに婚期を逃がしてしまわれなかと、街の者もみな心配しておりますよ。少しゆとりを持たれては？」

軍服を着込んだ中年男性にそう言われ、シアは心の中で溜め息をついた。

というのも、シアは軍の関係者からはあまりよく思われていないふしがあるからだ。軍の近代化による人員と予算の削減を提案していることが、ある種の治外法権を有している軍の上層部には気に食わないらしい。話しかけてきたこの男——確か將軍の地位にある男だったが、彼もその一人なのだろう。言葉に刺さが感じられた。

「仕事は……やり甲斐があります。民のためですから……休んでなどいられません」

思いのほか毅然と言い返した王女にわずかに気後れした様子の男性が、眉間に血管を浮かせてぴくりと震わせたのに気付いてしまった。

シアは有能すぎた。有能すぎるがゆえに、歳の離れた官僚からは嫉妬と反感を買いやすい。メイドとのさっきのやりとりが思い出される。

シアが彼をどうなだめようかと思いを巡らせていると……思わぬ助け船が入った。

「シア様、元気にしてた？」

「まあ、コレット。いらしてたのね」

声をかけてきたのは同じ年頃の少女だった。シアより一回り小柄な体型で、年齢は二三歳年下といったところだろう。

「はい、おじさま方。シア姫をお借りします」

そう言って中年男性の輪から王女を連れ出した少女は、にかつと笑ってシアの顔を覗き

込んできた。

「ふふっ、今日はずいぶんと可愛らしい格好してるんですねー」

と、栗色の髪を短く揃えた少女が言えば、

「やめてください……まったく、コレットはいつもそうなんだから」

シアが苦笑混じりにはにかんで礼を言う。

「でも、助かりましたわ。ありがとうございます」

かたやこの国の王女。そして話しかけてきた栗色の髪の少女は、この国の外務大臣の娘。同じ年代の友人が少ないシアにとって、幼い頃から王宮への出入りを許されていた外務大臣の娘は幼馴染みと呼べる唯一の存在だった。王族に対しては無礼ともいえる言葉遣いも、彼女ゆえに許されている。

「私も、どうです？ 今日のドレスはヴィオレ通りの仕立屋の新作なの」

「とっても素敵です。胸飾りの刺繡しゅうもコレットらしくて……」

シアからすると子供っぽいといえなくもない、小さな蝶の刺繡だった。だが、活発な妹といった印象のコレットにはそれがよく似合う。

褒められてにこりと微笑んだ少女とシアの談笑は、そばで見ている者にはまるで本当の姉妹のように見えた。おしとやかな姉と、コロコロと表情を変えてはそれに甘える妹。立場でいえば王族と一般市民の中間に位置するコレットは、シアにとって気安く接すること

のできる存在であり、それが彼女との良好な関係に繋がっている。

「あ、そうそう。シア様、聞きました？ 最近街で起こってる誘拐事件の話……」
コレットがふいに振ってきた話題に、シアはわずかに眉を擡める。

「ええ……聞いています。被害が増えてきていると……」

事件のあらましは、本来は畑違いな部分の国政を執るシアの耳にも入ってきている。

最近、街では連続誘拐事件が起こっていた。

被害に遭うのは決まって地位のある者の子女。最初は散発的で、莫大な身代金を要求される事件として認識されていた。それが変わってきたのは最近のことだ。

裕福な商家に絞られていた標的が広がり、一般市民や貴族までが被害に遭い始めている。その手口からある程度の人数、あるいは犯罪組織が関わっていると見られているが、警察機関はいまだにその尻尾を掴めずにいるのが現状だった。

幸い人心を乱すほどの騒ぎにはなっていないが、このまま被害が広がり続ければそうもいっていられないだろう。王族としても、耳の痛い話だった。

「私もお父様から気をつけるように言われて、最近、なかなか家を出られないんです」

とはいえ、どうやらコレットが言いたかったのは警察機関の無能を糾弾することではなく、単なる愚痴のようだ。

「今日も、お花を買いに行くだけなのに護衛の兵士がついてきちゃって……お店の方がび

つくりしてました。それに……」

だが、どうでもいい愚痴を延々聞かされながらも、シアの表情は真剣だ。

「どうにか……しなければいけません……」

「え……?」

つい呟いてしまった言葉を聞きとがめられ、ハッとするシア。

「あつ、いいえ。なんでも」

慌ててふるふる首を振りつつ、その顔には笑顔。

「でも、事件は近々解決すると思えますよ。きっと……誰かの手によつて」

「……?」

不思議そうに首をかしげるコレットの手を取り、シアはごまかすようにそれを引いた。

「そうだ、この間手に入れたお茶をご馳走するわ。いい香りの……とてもおいしいお茶な

のよ。さ、私の部屋に行きましょう」

「わあ、シア様の煎れてくれるお茶って大好き。たのしみ」

いつまで経つても子供っぽさの抜けない幼馴染みの手を、微笑みながら引いていく。

上品で可憐で、優しさに満ちた王女。そんな彼女がもう一つの姿を持っていることを知

る者は、この場には一人としていない――。

※

「うううっ、いや、やだよお……」

「助けて……もういや……」

すすり泣く声が闇の中に流れている。

街の郊外にある、静かな森林地帯。そこにはまだ中世の香りを残す建築物が、いくつも廃墟として打ち捨てられている。

その中の一つ。地下に石室を持つ砦跡があった。新しく敷かれた街道からは遠く、夜間はもちろん昼でさえ通る者のいないへんぴな場所だ。

そこに、数人の少女が閉じこめられていた。

「うるせえ。これくらい役得がねえとやってらんねえんだよ、こっちは。おら、股開け！」
部屋の隅に固まるようにうずくまっていた少女の中から、一人が引き出されてくる。

「今日はお前だ。しっかり悦ばせねえと……」

少女の胸元にかけられた手が無雑作に服を引きずり落とす。

「ひぐっ、う、ううっ……！」

こぼれ出た乳房を握り締められて、少女は恐怖に身体を竦^{すく}ませてしまう。

日の下であればさぞ可愛らしいであろう大きな瞳を涙に揺らして、少女はそれでも震える太腿を開いていく。おっとりとした印象を持たせるやや垂れ目がちな表情は引きつり、絶望の表情で男の嗜虐心を煽り立てる。

「よしよし、可愛がってやるからよ」

無雑作にあてがわれたペニス、陰毛をかき分け入り口をこねくり回す。ひくんと肩を震わせた少女は、必死に声を抑えるかのように下唇を噛んでいた。

ずぶ……ずぶ……

無理やり入ってくる亀頭の硬さに、噛みしめた唇が蒼白になる。

「ふっ、く……。うあ……ああ」

「なんだよ。おとといはあんなに声を張り上げてよがってたくせに。まあ……、それがいいんだけどな」

温室育ちなのか日焼けのない身体、そのあちこちには乱暴が繰り返されていることを表す擦り傷が無数についていた。ポロポロになった服も、元はさぞ高級なものだったのだろう。うことを窺わせている。

ずぶずぶ……ぶぶっ、ずんっ！

「きやはんっ！」

奥を突かれ思わず迸ほとばしった声に目元を赤くして、少女はそれでも首を振り拒絶の意思を示

すが。

「ならこれでどうだ。ここが好きなんだろう？」

男の指がペニスの埋まる蜜口のはしっこを擦り上げた途端。

「んはっ、はあ、う……やあ、あ……」

声に甘やかな揺らぎが混じる。

陰核が押さえられ、擦り上げられ……挟み込むようにして剥き上げられて。

「はう、ああ、ふう……はああ……」

一週間前には少女の知らなかつた感覚が、絶望に背を押されて盛り上がってくる。

にち、ずちゅ……ずりゅ、ぶぶつ……。

抽送の音に水音が混じり始めるのに、そう時間はかからない。

「んう！ 擦らないで……え、ひんっ！ あはあ、ううっ……！」

胸元を隠すように押さえつけていた腕がほどけ、腰が揺れ始めて。反らした喉が激しく

揺れて黒髪がさらさらと流れる。

ペニスにまとわりつく秘肉が、キュツと締めつけを強めていく。

「そうだ、もつと締めつける！」

男は夢中になって腰を振り始めた。

犯される少女の周囲にはまだ他に数人の少女がおり、涙を流してそれを見詰めている。

それは昨日の自分の姿であり、明日の姿でもあった。

誰もが、自らの運命に絶望していた——その人物が現れるまでは。

「……そこまでだ」

鈴の鳴るような、よく通る声。一瞬、空気が凍りついた。

「だっ、誰だ！」

慌てて振り返った男が見たのは……部屋に一つのランプが浮かび上がりさせる細い影。

細身のラインがはつきりと浮き上がる服は闇にも似た黒。

スカート丈の短さ、飾りベルトや編み上げのブーツ、そして密着して胸の膨らみも露わな活動的衣装はスマートなドレスを思わせる……それは少女だった。

その人物は、手に持ったモーゼル銃を男に向け——。

「殺しはしない。が、それなりの痛みは味わってもらおう」

静かに呟いた少女は、ポニーテイルに結わえた金髪の前髪をさらりと掻き上げ——啞然としたままの男に向かって撃鉄を引いた。

※

「遅れてごめんなさい……。でも、もう大丈夫」

自分が助けられたのだとやっと実感することのできた少女たちに抱きつかれて、その頭を撫でながら……。金髪の義賊は優しげに囁く。

細いながらも肉感的な身体を露出の多い活動的な衣装に包み込んで、険しい視線と凜々しい雰囲気まを纏った少女——それでいて優しさを漂わせるその人物は。

(少し遅れてしまったけど……でもやっと尻尾を掴んだ……)

手には銃を、胸には正義の意思を宿して。

顔つきと服による印象の違いで一見そうとは分らないが——それはシアだ。昼は国務に忙しい王女の持つ夜の顔。

それは法では裁くことの困難な犯罪者を断罪する、義賊の顔だった。

※

太陽が昇り始め、外ではやつと小鳥たちがさえずり始めた早朝。

執務室の扉が突然に開かれ、びっくりしたメイドたちが一斉に振り返った。

そこに立っていたのは、彼女の趣味をふんだんに取り入れたドレスに身を包む王女。

「姫様!? 申し訳ありません、まだ作業が……」

夜まで執務に忙しいシアのため、執務室の清掃は日が昇ってから王女としての仕事を始めるまでの短い間に行うのが恒例。だから、掃除にいそしんでいたメイドたちははてつきり自分たちが時間をかけすぎてしまったのではないかと慌てるが……。

「いえ、こちらこそごめんなさい。今日はぜひ早く目が覚めてしまったの」

にこりと微笑んだシアは気にも留めていない様子。連れてきた近衛警察の制服を着た年配の男から紙束を受け取り、さつそく目を通し始めた。

「昨夜保護された少女たちの調べは、もう終わりましたか?」

「はい。捕らえた賊も同様に。そちらにまとめてあります」

ただ、相手もやはりそれなりの訓練を受けた者。仰向けで関節を床に縫いつけられた手足はびくともせず、決して男に劣ってはいない体術もこのままでは発揮できない。男の吐いた息が顔にかかり、義賊王女はその不快感に顔を逸らした。

(コレット……)

そこにはぐつたりとした幼馴染みの姿。服を剥かれ汗まみれになって、可愛らしい栗色の髪は手入れもされず毛先が乱れている。

少女を無惨な姿にしたのが今自分を押さえつけているこの男なのだと、激しい怒りが再び湧いてきた。頭に血が上り、しかし身体は動かせず。

「……許さない……ゆるさない……！」

身悶える少女を大男はしばらくもてあますように思索していた。が、それもすぐに終わったようだ。見下ろす視線にあった刺々しさが消え、違う色を帯びていく。

「まあ、いい……。誘拐してきた女じゃねえなら、オレの勝手にしても構わねえだろ」

今自分が組み伏せているのは、ここに監禁された他の女たちとは違う……奇矯ききょうにも見える黒い服を纏った少女。ベルト付きのロンググローブや太腿まで続くハイソックスは肌に密着し、発展途上の少女らしい手足の細さを見せつけて。露出した肩から胸元までの白い肌は、身体の線が細いわりに豊かな盛り上がりを見せる乳房へと続いている。

「……いい女だ……なあ」

改めて少女を見下ろし、大男の口元が笑いに歪んでいく。

一見してじゃじゃ馬で、はずっぱな印象を与えるような衣装といつてもいいのに——なぜだろう、わずかに尻尻の吊り上がった凛々しい目を見てみると、その奥に深い知性やおしとやかな品性の存在を感じてしまう。それが獣欲を刺激する。

「くう……いい匂いをさせてやがる。おめえ……処女だな。そうに……違いねえ」

「……………」

顔を背けるシアの首筋に生臭い息がかかる。男がくんくんと鼻を鳴らしながら、鼻先でうなじから肩までをなぞっていた。

嫌悪感に胸を潰されそうになりながらも、義賊の少女は声を漏らさない。屈辱感に唇を噛みながらも、その瞳は強い光を灯したままだ。

「無口な女だあ。だが、こうでなくちやなあ……」

肌の出た首から肩の間……、ワンピース状の衣装の、その肩紐をずらすために頬ずりし、「他の女はすぐに泣き叫んで、躡けるのが大変だったからよお」

左の肩紐を外し終えると次は右へ。ずりつと肩紐のずらされる感覚に、逸らしたシアの瞳がわずかに揺れる。ただし相変わらず唇は一直線に引き結んだまま綻びを見せず。

シアを押さえているため、手が使えないのは男も同じ。代わりに男は顔を近づけ……。

「……………く」

わずかだがシアの唇から初めて声が漏れ出した。

男の齒が肩紐の外れた衣服の端を噛んでいる。そのまま服を引き下ろすように、少しづつ少しづつ……引っぱって。

侍女以外、誰にもさらしたことの無い素肌をさらけ出されようとしている。

羞恥が胸に渦巻き、屈辱の黒い淀みが溜まっていく。表情は緊張にこわばり、心臓はドクドクと血流を増して……しかし。

(こんな屈辱……辱められたコレットに比べれば……)

シアは気丈だった。もしこれが昼のシアだったなら……王女としてのシアだったなら、目の前の男の存在感に押し潰されていたかもしれない。

だが、今は違う。危険の中にあえて飛び込むために作り上げたもう一人の自分は、こんなことぐらいでくじけるような自分ではない。

そのプライドにも似た思いが少女を強くしている。

(それに、きつと……)

胸の中の思いを強くし、少女は真正面から男を睨んだ。

目尻を吊り上げ、瞳を怒りに燃えさせて、ほんの少しだけ頬を羞恥に染めつつ。内心の不安や恐怖を無理やり押さえつける。

細い身体にも確かな女らしさを醸しだし、端正な顔立ちの表情には強い意志と隠しきれ

ない羞恥とを同時に浮かび上がらせている少女。

やはりそこらにいるような女とは違う——それを直感した男の喉が、極上の獲物を前にゴクリと鳴った。

「……………」

無言の少女の衣服が剥がされていく。少しずつ盛り上がりの角度を増していく柔らかそうな乳房の稜線——それが姿を現し始めた。

真つ白な肌はしつとりと吸いついてくるようなきめの細やかさ。全身の肉づきが薄く鎖骨は艶めかしく浮かび上がって……なのに、そこから視線を下げれば膨らみは急峻に盛り上がっている。しかも、それが形よく張りのあることは服の上からでも一目瞭然。柔らかさと張りを併せ持ったその感触を思い浮かべるだけで、コレットの薄い胸に執着していた男でさえ股間の剛直がビキビキと音を立てるような興奮を感じる。

「へへ……恥ずかしいか？ 男に見られるのは初めてかあ？」

興奮に満ちた男の方がむしろ落ち着きを失っている。最初は獲物をいたぶるようにゆつくりした動作だったものが、欲望から急かされるように乱雑になっていく。

手が使えないため顔を振りたくり。左右の乳房をいっぺんに露出させるのは面倒くさいとばかりに右乳房だけに集中して。

ずりずりと、下げられる生地が膨らみの頂点にさしかかる。わずかに引っかかるような

感触があつたあと……一氣に引き下ろされた。

(……………)

シアはわずかな身じろぎ。

白い肌そのままにぷっくりと、形も見事に盛り上がった柔肉。柔らかい円い果肉が、贅肉のない胸板の上にぽんと置かれているよう。

下着の類は着けていない。まっさらな白肌の上には、くすみのない薄赤の乳首が揺れている。同年代の同性からすると大きめの柔肉は細かく震え、それは手の平で握ればさぞ心地よいであろうこの乳肉が充分な張りを持つていることの証であつた。まして、片乳だけの露出で服の布地から不自然に締めつけられた右乳房は、縞れた生地から下乳を支えられているような状態。淫らに形を揺らめかす。

細くかよわい印象の身体に実つた熟果実を前に、たまらず男がむしゃぶりつく。

「う……………！ くっ……………！」

ちゅ……………ぢゅ……………ずずつ……………！

卑猥な音を響かせて髭の顎が擦りつけられる。唇が吸いつく。舌が肌を撫で回す。

(……………この程度……………の、屈辱……………くらい……………)

それは予想以上の、凄まじい嫌悪感だつた。こんな、名前も知らない男に裸をさらし、舌を這わされる屈辱。かつて感じたことのない感情。

ゴム鞠を床に置き、手の平で押し潰すように。欲望の赴くままに顔をすり寄せられ、顔面に押し潰された乳房がぷにやりと歪んでいる。しかし形を崩すことをよしとしない乳房の張りはぷりぷりした肉を跳ねさせ、揺らし、圧迫から逃れようと形を変えて……。

ちゅ、ちゅぷっ！

舌の這いずりに奇襲されている。

「っ……は……はあ、はあ……」

柔肉の丘陵はあつという間に唾液まみれ。

自分の肌が舐められているという現実、その光景が目の前にある。さすがのシアも混乱気味で、閉じていた口からは苦しげな吐息が漏れ出ていた。

「う……!!」

ねっとりとした感触が乳房の丘を駆け上がり、頂点の蕾へ。白から赤へと次第に色素を増す乳首周辺をくるくると舞う。

くすぐったい。気持ち悪い。肩が震える。背筋に悪寒が走る。

屈辱、不安、苛立ち、恐怖……様々な感情が湧き上がって義賊の王女を混乱させようとしてくる。自分をコントロールできない焦りに、シアはキュッと唇を噛んだ。

「う……っ……」

「つぶはあ……。どうしたどうした、だんだん弱々しくなってきたぞお」

將軍がアンプルを傾けると、その中から数匹のミミズが落ちた。

虫とっていいのかどうか、今度はその生物がヒルのように貼りついた。その吸引力でぴったりと肌に密着し、もぞりと蠢きながら……開いた胸元から服の中に。

「ひっ、うう……」

気味の悪い生物が貼りついて、身体を蠕動ぜんどうさせながら這い進む。胸の谷間を降り、へそをなぞりながらどんどん下方へと向かい……やがて下着の中に頭を突っ込んだ。

下着の中……シアの恥丘には、そんな生物がもう十匹以上這い回っている。

「女を責めるために生み出したこれは、植えつけられた本能のままに動くのですよ……」

將軍の言葉通り、それらは恥丘に貼りつき、恥毛をかき分けながら秘裂をなぞっている。

一匹は割れ目に頭を潜り込ませて膣口周辺を。一匹はクリトリスの上をチュウチュウと吸うような吸引力で這いずって。そんなのが十匹以上だ。

（でも……っう、だめ……気をしっかり持たなくては……王女として、っは……あ）

だが……、気持ちが悪いだけ、そう思っていた感覚は次第に変化している。額には汗が滲み、さつきまでは反抗的だった視線が時折宙を彷徨うようになっていく。

「気のせいかな、頬が上気しているようすぞ？」

「っ……」

將軍に言われて咄嗟に顔を伏せるが、それでは変化を肯定しているようなものだ。

「恥ずかしがることはない。これは姫としての殻を破ってくれるものですよ」
 將軍はそう言つて、周囲の將官に目配せした。

「そうだろう？ お前たち」

上官の声に頷いて、王女を拘束したまま待機していた將官たちが動く。

手を伸ばし、腕を掴み、肩を押さえつけて……。

「さ、下がちなさい……っ！ やめてっ！」

怒りと屈辱と恐怖と。混乱する頭を必死に落ち着かせて男たちに抗うシアだが、いかんせん相手が悪い。多数の、軍の訓練を受けた者たちが次々組みかかってくる。

(い、いや……！ 離してっ！ くううう！)

どさりと倒れ伏して。

「姫様のからだ……。細いなあ……すげえ綺麗だ……」

「おやめなさいっ……無礼なっ！ う……！」

手足は銃で武装した兵士たちに押さえつけられ。ソファでもなくベッドでもなく、硬い床へ無惨にも大の字に貼りつけられて。広がったドレスの裾は無惨に踏みにじられ、

「だめだ、俺、興奮してきた……」

血走った目の男に端を掴み上げられる。

「ひっ、や、やめ……」

ふわりと持ち上げられた裾から、真つ白な足が姿を見せる。その根元、周囲の男の目にシヨーツの白を垣間見られながら……内腿を愛でるように撫でられた。

「ひあ……！　なんて、は、はしたないことを……！」

びくんと身体を跳ねさせ縮こまる少女の肌にも、男は涎を流す顔面を寄せていく。

「お、王族の女は、みんな、こんなにいい匂いをさせてるのか……？」

「ふう……！　や……やめ……！」

太腿にぬるい鼻息を感じた瞬間、シアの頭は真つ白になっていた。

さつきまで胸に燃え上がっていた屈辱の炎が、混乱に満ちた羞恥で塗り込められていく。心臓が早鐘を打ち、全身が汗を噴き出して火照り出している。自分の錯乱が理解できても、自分では打つ手が皆無なことが焦りに拍車をかける。

（どうしてこんなつ、わ、私は……この国の……ううっ！）

無雑作に伸ばされた腕が乳房を掴み上げていた。

「えっ、や……！　いやあっ！」

薄いドレスに包まれた乳房が、その柔肉に指を食い込ませ、ぐにやりと卑猥に形を変えている。現実感を感じられない無礼な光景……なのに、身も心も悲鳴を上げる少女には次々と手が伸ばされていく。

「はあ……は、くう！」

ぐにっとな握りつぶされる乳房が悲鳴を上げている。下半身に潜り込んだままの拷問生物が暴れている。

相手はこの国の王女だというのに、兵士たちには遠慮も気後れもまるで感じない。目の前にぶらさがった極上の獲物をいたぶろうとする獣欲しか感じ取れない。

(こんなこと許されぬ……！ 絶対に許さぬ……！)

怒りが湧き上がった。屈辱に胸がざわめいた。そして……、

「つう、はう……！」

興奮に震える手に乳房を絞り上げられ、シアの喉が痛みに鳴いた。傍若無人な者たちに怒りが湧くのに、それは新たな屈辱を生むばかり。

「ああ……やわらけえ。俺、姫様のチチを揉んで……！」

編み上げ紐でキュッと締めつけられていた胸元が、紐を緩められて布がしわくちゃになるまで揉み廻まわらされている。服の上にも量感豊かな肉が揺れて男を満足させている。

「こつちもだ……憧れのシア様の太腿……白くてすべすべして、たまらねえ」

「んっ……！ っ、や……！」

そして太腿も。

頬ずりし、鼻を蠢かし、あまつさえ舌を伸ばしてちろりと舐め上げて。

「くう……！ っは、はあ……あう、うううっ、かは……！」

必死に手足を暴れさせているせい、シアの息は乱れ、全身からは蒸し風呂のごとく汗が流れ出る。それが肌を濡らし、少女特有の甘やかな体臭を漂わせていた。欲望に火のついた男たちの行動はとどまるところを知らず加速していく。

「やめなさいっ！ 離し……っぐ、う……」

上体を起こし、ひねり、抵抗を示していた身体が押さえつけられる。喉首を絞めるように押さえつけてきたのは、部下の暴走を眺めていたギザ將軍だった。

「なんだ、お前たちそれだけで満足か？ 楽しめる場所はもつと他にあるだろう」

「っ、ごほ……！！ あ……ああ」

息苦しいまでに喉を押さえられた少女の目に映ったのは——はだけられた股間と、そこに屹立した凶暴なペニスだった。

「処女は私がもらおうとするか。お前たちはこの王女がただの女に墮とされる様をようやく見とおけよ？ そうそう見られるものでもあるまいからなあ」

（い……や……！）

怒りに血の上ついていた頭が一瞬で冷えていく。將軍の申し出を断ったときから……いや、クーデターが起こったときから貞操の危機は感じていた。

それでもいざというときは徹底的に毅然と抵抗し、王女としてふさわしくない弱みなど最後まで見せはしないと固く覚悟していたのに。

「やっ、やめなさい……。やめて……！」

心優しい王女としてのシアは、頭で考えていたほどに強くはなかった。

もし義賊として犯されるなら少しは覚悟が違ったかもしれない。しかし、王女として犯され、王の一族に連なるその権威が穢されるのは……予想以上に苦しい。

(う……うううう……！)

唇を噛みしめ、わずかに漏れてしまう声を懸命に呑み込んで、シアは男の手が下半身に這う感触に耐えようとした。

だがそれもわずかなことで、

「ひっ！ あ、ああ……いや、です……っ！」

下着にかかった指が邪魔な布をずるりと剥いてしまうと……狂いそうなほどの羞恥で胸が張り裂けんばかりになってしまふ。目を閉じ、現実から逃れるしかなかった。

少女の股間——繊細さを感じさせる細い恥毛がほわほわと申し訳程度に生え、その奥地には見るだにぷりぷりした肉の恥丘がある。緊張にこわばる身体を象徴した秘裂はまだびつたりと貝を閉じ、わずかにはみ出る小陰唇の小さな両ヒダを可愛らしく覗かせて……。

見た目は清楚な性器といえるのに、そこにうじゃうじゃと蠢くのはグロテスクなミミズ。

「見ろ、これが王女のオマ○コだぞ……？」

「ひあっ！ あ……！」

指が秘裂を押し開く感触。中年男の粘つく声がぐらぐら揺れる頭の中に響く。

ぎゅつとまぶたを閉じ、しかし周囲に流れる雰囲気に耐えられず目を開けて……震えるその瞳は、周りを囲む将官たちが食い入るように自分の股間を見詰めていることに気付く。

「ひつ、やあ……あ、見ないで……！ 見てはいけません……っはあ！」

驚愕きょうがくに瞳を大きく開いて、しかし声は弱々しく震えていた。

今まで必死に閉じていた股間が無理やり広げられたことで、股間に巣くついていた拷問生物が嬉々として動き回っている。

広げられたヴァギナに潜り込もうと群がり、胴体をくねらせて……。

にゅぶぶつ……！！

「くはあ……！！ いやあ……入ってく……るう……！！」

膣口がちゆるちゆる吸われるような感覚があったあと、それが内部へ。

ごくごく細いミミズは難なく入り口を潜り抜けていた。処女膜に侵入を妨げられながらも、ぐちゆりぐちゆりと確実に奥へ。

「っ……ふあああ！ いやあっ！ やめなさいっ！ やめてえ！」

より敏感に感覚を伝えてくる部分を這い回っている。

嫌悪感と、それとは確実に違う感覚……。ぞくりと背筋が震えた。

「おやあ？ ずいぶんと勢いよく呑み込むものだ……そんなに濡れているのかな？」

(やめて……、そんな、ことを言うのは……っ)

男たちが自分を——広げられた恥ずかしい秘裂を眺めている。そこは今、多数のウジが這い回っているような状態で……しかもこのぬめるような感覚は、この生物の動きに対して自分が分泌してしまった液体に違いない。どうなっているのか想像もしたくなかった。

「くくくっ……はしたないですよ、実に……」

それは王女に向けられるような視線ではない。性欲にまみれ、王女のシアを蔑み弄ぶような生々しい感情が剥き出しの視線……。

「だ、だれか……やめさせて……、こんなこと、やめさせなさい……!」

自分の命など聞くはずもないのに……ひとかけらの期待を胸にそう言って、すぐに自分の間違いに気がつかされる。

「これは間違いなく処女だな……。見ろよ、將軍の指に押されるたびに入り口がピクピクひくついて……虫がたかった綺麗な色の膜が覗いてやがる」

「くくっ、貞操を捧げるのは貴族か他の国のお偉いさんか……そのはずだったのにな」

「せっかくの処女をこんなところで、しかも俺らみたいな男に見られながら失うってんだから……すぐ興奮するぜ」

興味津々な見世物でも見るように、欲望を滾たぎらせた目で眺めて……。男たちは王女を蔑む言葉ばかりを吐いている。誰も味方などいない。

(いや……あ……あ……こんな……の……)

足を押さえつけていた将官がさらに、ぐいっと股を広げる。張りつめた筋肉はガクガクと震えるばかりで、シアが力を込めても閉じれない。

ずりつと押しつけられた硬いものの感触——少女の身体が恐怖に震える。

ずりずり……。亀頭が膣口をほぐそうとするように上下になすりつけられて。

「ひっ！ ひい、い……あ……」

ヒダと陰核の膨らみがくにくくにゆ弄ばれる。

群がる虫などお構いなしだ。むしろ、亀頭に圧迫されて苦しがるミミズ生物が暴れるのを楽しむように、ぬるりとまとわりついてくる愛液を引き伸ばすように。

ぐにゆり……。ぬっ、ずるる……。

「うあ……ああああ……！」

頭を突っ込んでいたミミズを巻き込むようにして、硬いものが圧迫してくる。膣口がそれに合わせて広げられていく。異物感が内部へ……進み入ってきた。

「いつ、やああああ……！」

ずぶぶぶ……！ 剛直が身体の内に入り込んでくる強烈な衝撃。すぐに、何か引き裂かれる痛みがあった。

「ひ……！ つ、ふ……あくううっ！」

シアの喉が反り返り、歯を食い縛る叫びが漏れ出る。

「おやおや、あっけなく処女を散らされてしまいましたな……？」

自分で非道を働いておきながら他人事のように言つて、將軍は腰を進める。

「それにしても姫様はキツイ穴をお持ちだ。これではすぐに果ててしまう」

半笑いに顔を歪めてのしかかる男。身体を寄せてくる異性に嫌悪感を抱いているのに、身体は引きつったように動かせない。

膣口はにゆるりと広がりペニスをぱっくり啜え込んで……しかもその隙間には、挿入に巻き込まれたミミズ生物がウネウネと暴れている。

「んううーっ、いつっ……くは……ああ……！」

強烈な痛みが走り抜けたあとに襲ってきたのは、誇りを穢された心の痛みだった。

（私っ、純潔を奪われて……こ、こんな……ひどい……）

悔しかった。ろくな抵抗もできず、思うがままに蹂躪されて屈辱だった。

なのにその憎しみを込めたはずの視線は、今にも泣き出しそうに潤んで弱々しいもの。できるだけ険しい表情を——動揺を押し隠そうとする強がりには効を示さず、瞳は頼りなく揺れて、唇は激しい呼吸で半開きの開閉を繰り返していた。

それは異様な挿入感によるところも大きい。

（つつう……きつ、気持ちわる、つつあ……！）

痛みこそあれ、それよりも下半身を埋め尽くすような異物感が凄まじい。身体を裂くようにして潜り込んでくるペニスの感覚と、その周囲にまとわりついてグネグネと蠢くミミズ生物の感覚……。そのどちらもが異様。

「っはあ……ああう！」

一気に最奥まで突き込まれると、亀頭に押し込まれた拷問生物が子宮に押しつけられ、ぶちぶちつとちぎれた感触があった。

(ひ！ いやあ……！)

わけの分からない生物が自分の中で胴体をちぎれさせ、それでも死ぬことなくビチビチ暴れ回っている。どろりとした体液を噴き出しながらじゅぶじゅぶと、奥を掻き回すごとく胴体をのたうたせている。

それは少女には耐え難い感覚だった。まして、性行為すら初めての王女には。
「うあ……あ！ 動いて、る……中でえ……っはあ、は……！」

(気持ち悪い、こんなの耐えられない、誰か助けて——)
あまりのことに混乱し、その背を思いきり反らして金髪を床に散らす少女を、男の腕ががっちり固定した。

ずりゅ、ぬぶぶ……！ ずりゅっ！

抜け出ていくと感じられた剛直が、息つく間もなくすぐに再挿入。

「ひあ！ んっ、んんっ、はああ、く……ふあああ……っ！」

にゆる、ずちっ、ぬるるるっ……！

細い身体を激しい抽送に悶えさせて、シアは逃れようのない暴虐にひたすら身を縮めるばかり。苦しむ少女を愉しむような視線が多数、周囲から注がれていた。

（このような屈辱、っんっ……！ ぜ、絶対に屈しな、んっ、ああっ！）

自分をこのような目に遭わせる暴漢たちを決して許さない。そんな決意を繰り返し心の中で叫び、必死に自我を保とうとする。

しかしそれとは別に、惨めな自分に身の竦むような思いもある。悲しくて、情けなくて、どうしようもない弱い感情がゆらゆら心に揺れている。

だから——どくん、と心臓が高鳴ったのはその弱さのせいかと思った。

「あっ、ううう……んっ、はあ……はあ……あ」

だが、その動悸は収まらない。それどころか勢いを増していく。

（身体が……どうして？ こんなに……あつい……）

血流が激しくなる音がドクドクと耳に響く。

全身からじんわりと汗がにじみ出すのが手に取るように分かる。

混乱した思考のせいか頭の中がぼんやりして、風邪で熱を出してしまったかのように。

（……………あ）

ほんの数秒、思考が途絶えていた。

しかもついさつきまで感じていた痛みが、どこかに押しやられている。

「ははは、姫様も感じ始めたようだ。中の肉が絡みついてきましたぞ……！」

（え……なにを言っているの……？ 私は、そんなこと……ない。無理やりに……）
おかしい。

身体も頭の中も酒でも一気に呷ったように熱を持って、どこか現実感が乏しい。

「おお、中から汁が溢れて……膣のヒダがずるずるしゃぶりついてくるわい」

將軍が言い放つ戯れ言など気にするまでもなく嘘のはず……なのに。

「んあ……はあんっ……！ ふう、んっ、くうん、っんん……あはあ……」

自分の口から漏れ出る吐息に、信じられないくらい緩やかな声が混じっていた。

ふと、あの時——幼馴染みを助けたときに見た、コレットの乱れた姿を思い出す。

（まるであの時のコレットのような声を……私が出している……の？）

男が腰を振るたびに聞こえる音も——ずちゅ、にちやつ、となめらかさを示す水音を立てて。まるで犯されることに快楽を感じているように。

「ふははっ、虫どもの体液は女の身にはたまらん媚薬だろう……？ 処女の娘が犯されて、こんなによがるくらいだから……」

その時、悦に入った將軍が口走った言葉がすべてだった。

(あ……ああ。もしや……、そんな……あ……)

今もまだ膣内で寄生虫のように貼りついてグネグネのたくっている生物が——この異常な感覚の原因。女を性的に狂わせてしまう体液は、膣道で、子宮で、撒き散らされている。

(だめえ……！　こんな感覚に……取り込まれてしまったら……ああああああ！)

自覚した途端、身体に満ちようとしていた感覚が快感に変容した。

ぎりゆつと突き込まれたペニスが下腹の内部を擦り上げる。ざわりと心が浮き立った。

「ひいつ！　擦れ……！　あひつ！　んう、んんつ、つふああつ！」

ぞくぞくつと背を走る快樂の波。身体中の肉自体がくすぐったさを発しているようで、それが心地よくてひどくもどかしい……。

(流されては……だめえ……！　なが、されて……は……、くふ、ひいっ！)

このままでは自分を失ってしまう。一度相手に屈したと自覚してしまえば心が崩壊してしまう。それが分かっているのに、だからといってどうすればいいのかわからない。

「あひつ！　ううあ……やめえ……んう、つふ……、はあ、はう……うん！」

最初の頃とは一変したスムーズな出し入れ。狭くすぼまる膣口はペニスの突き込みの角度に合わせて卑猥に口を広げている。本能で潜り込もうとしているミミズたちを、呑み込むようにしてにちゃにちゃと咀嚼そじぐしている。

挿抜ごとにめくれる膣口から、ぶちゅつと愛液の迸りがあった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>